

ADDICTAM

Magazine for High-End People

アディクタム

6

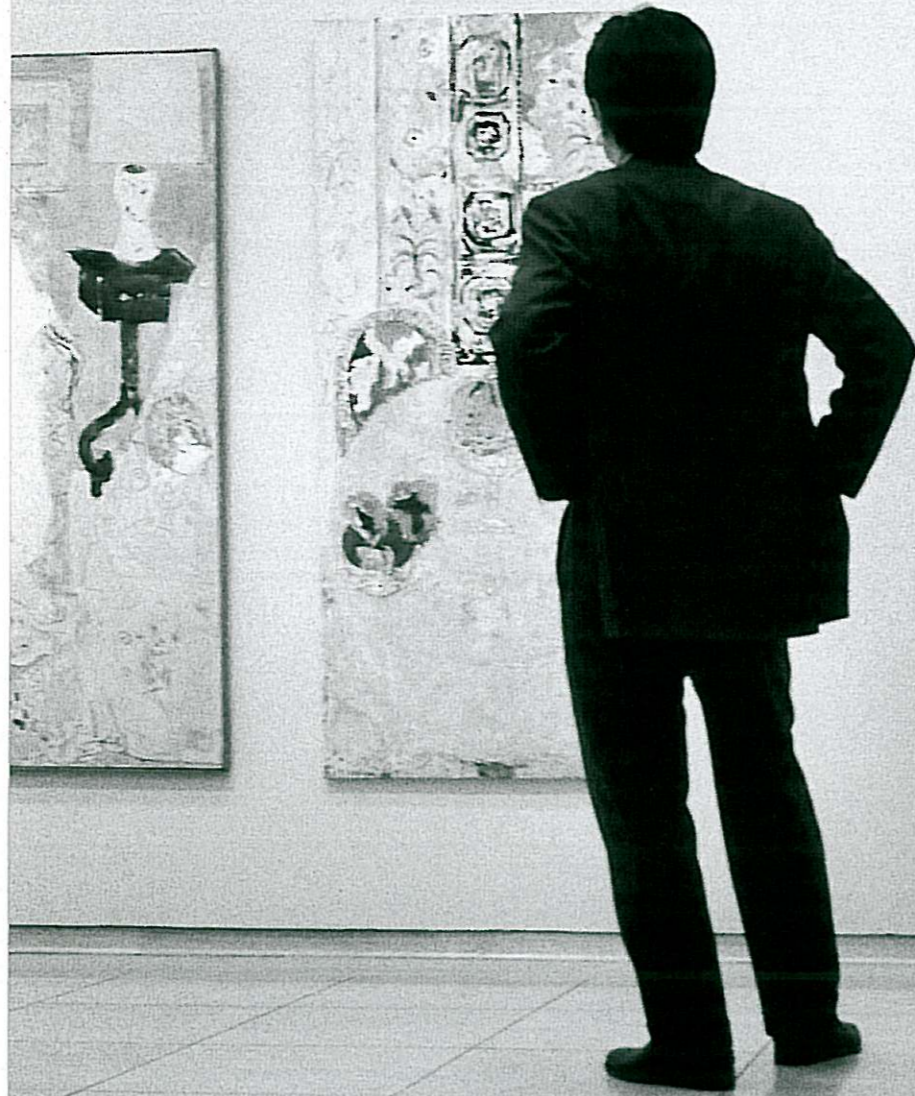
June
2004
N°008



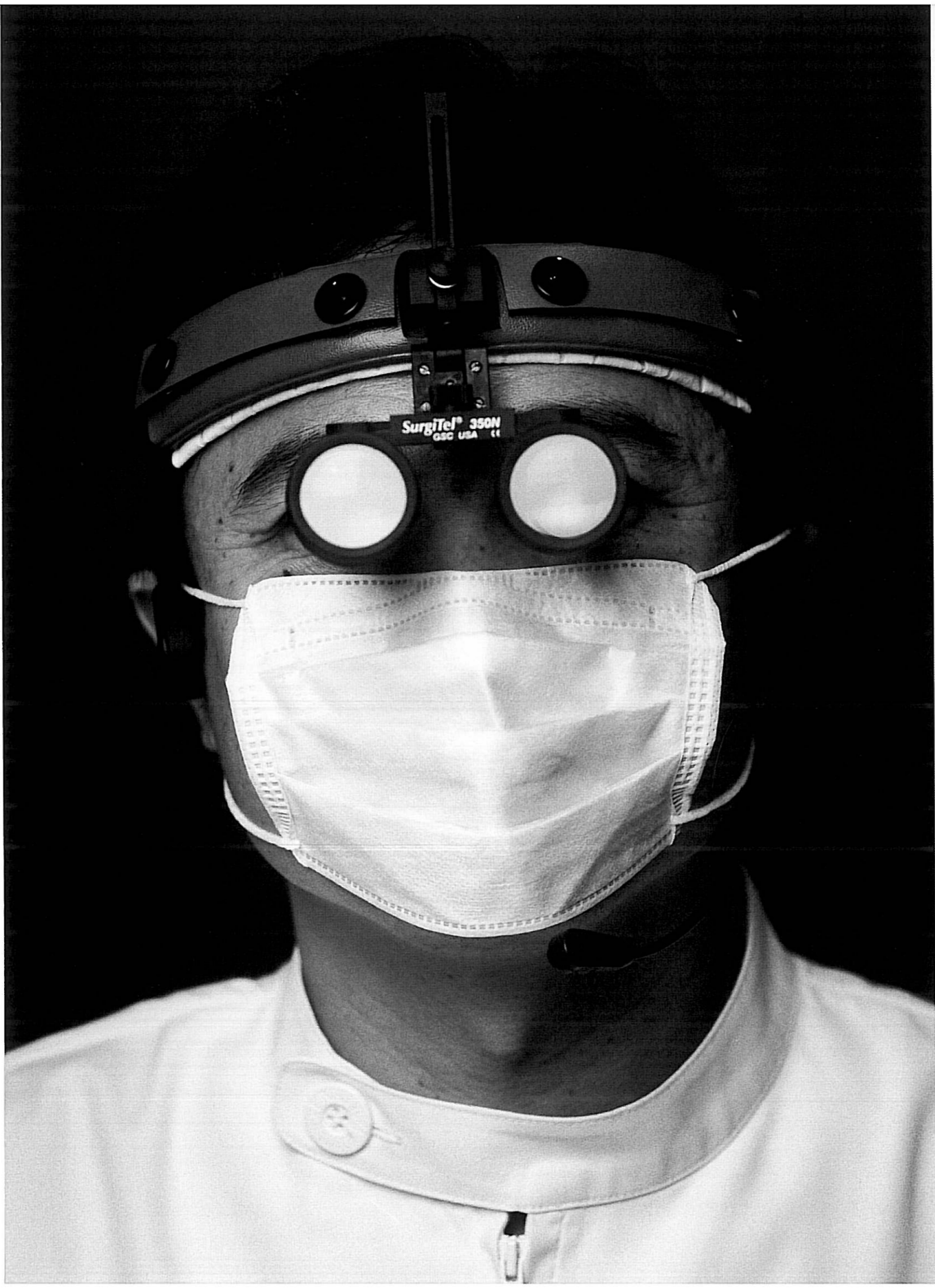
あらたし
天地根元。

**More
Essential,
More
Spiritual.**

写真©依田恭司郎
photographs by Yoda Kyoshiro



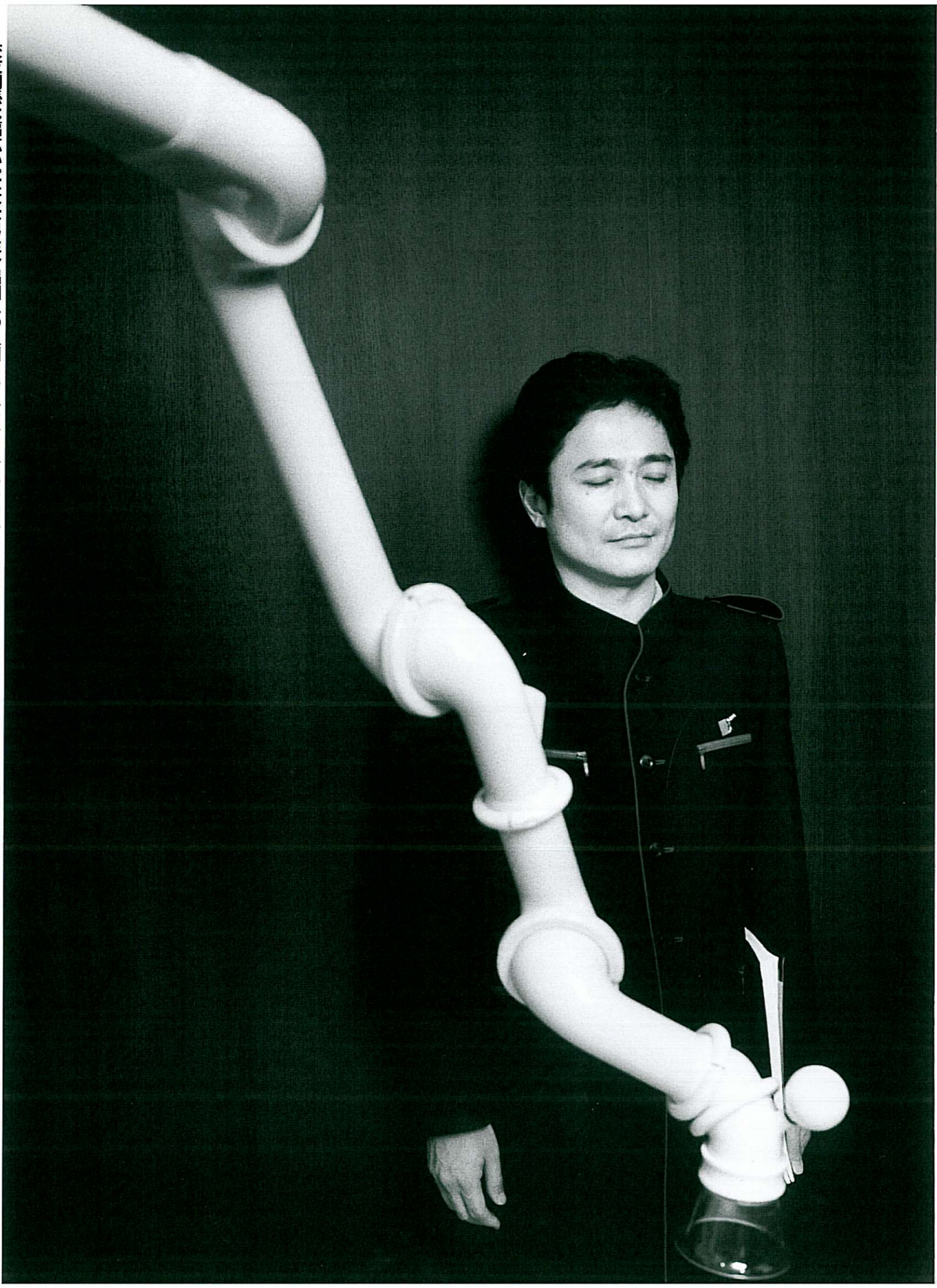
Mr.
DENTAL-ARTIST
歯科と美容のコラボレーション
中原悦夫
NAKAHARA ETSUO
歯学博士・クリニックデュボワ院長



仕事場と目と鼻の先の銀座界隈は世界でも稀にみる「美術街」。ぶらり立ち寄った日動画廊本店で見かけたのはフランスのピエール・ルシユールの大作。「色彩の詩人」といわれる絵を前にしはし佇む。爽やかな風が吹き抜けるような画家の世界に没入すれば、昼下がりの散策は癒しの空間へと変貌する。

交友関係は幅広い。六本木男性合唱団への入団もそんな付き合いの中から生まれ、昨年九月の欧州公演旅行は忘れられない思い出となった。団の制服を着ると「レクイエム」のパートが自然に流れ出す。家族への思いと感謝、仕事への満足感と悔恨、これからの苦闘と期待、歌は人生だと思ふ。

Mr. DENFEAL-ARTISTE



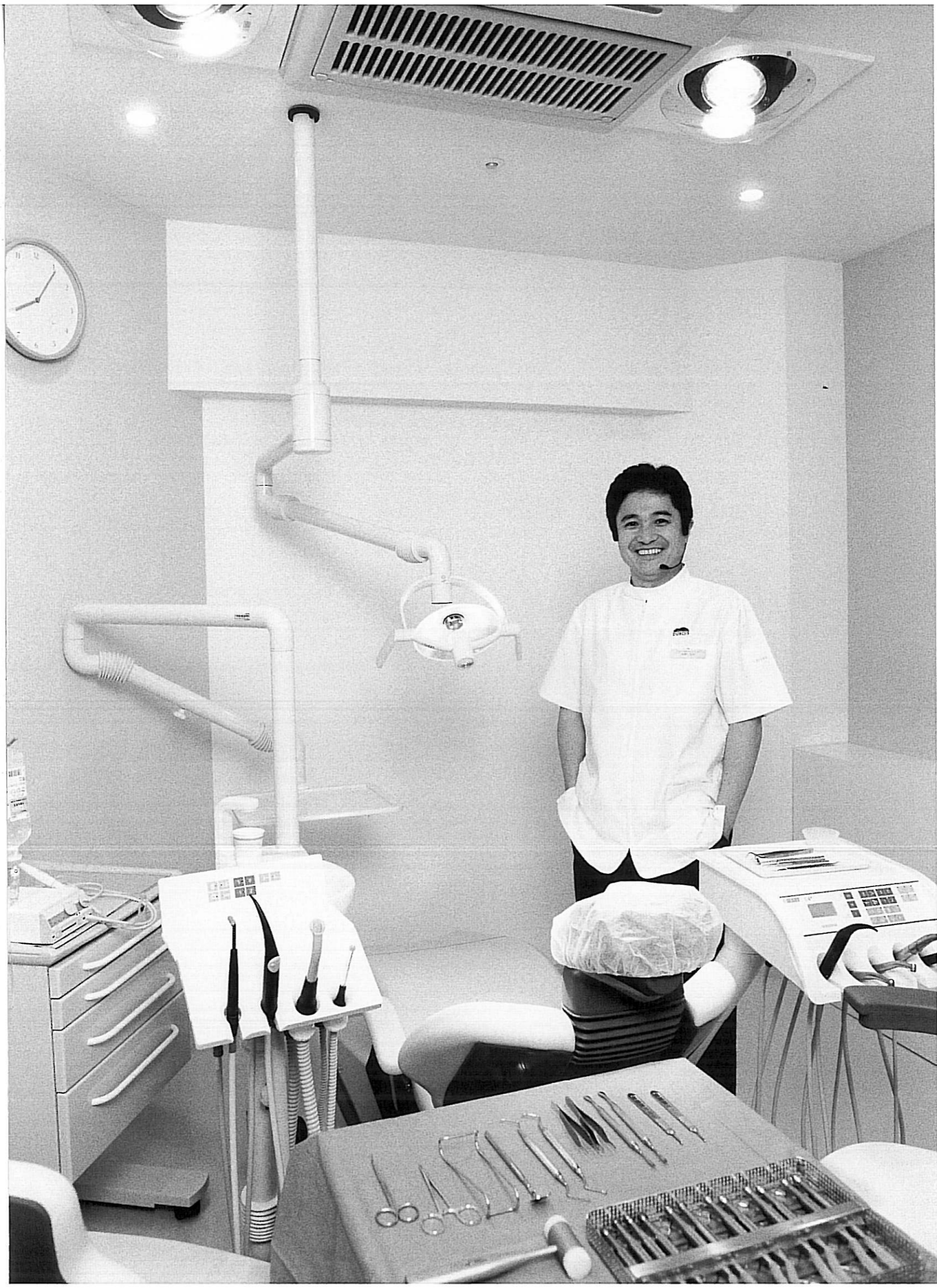


宇都宮のサンヒルズCC。十人の男女が熱心にクラブを振っていた。フレッド・シューメーカー氏が主宰するエクストラオーディナリーゴルフ・スクールのレッスン現場。今日は四カ月ぶりのゴルフで動きを取り戻すのにひと苦労。三年ぶりに来日の創設者フレッド(右)とリーダーのギャリー・レスタター氏(左)と久しぶりの交歓。

春秋二回開催されるスクール。四年前に出会い体験したが、ゴルフ観が一変したという。自由さ、無意識、自然体……とにかくゴルフが楽しくなった。人間の潜在能力をいかに引き出すかという独自のコーチング理論は知る人ぞ知る存在。クラブの「投げ投げ」はあるべきスイングが会得できる秘法とか。

Mr. DENTAL-ARTIST





東京・日比谷の帝国ホテルプラザ。今、その四階フロアは「ホテル&クリニック」構想により「癒しと美容のスペース」へと大変身を遂げようとしている。かつて「予防と美容」というコンセプトを歯科に導入しようと考えてから二十年。クリニック「デュボワ」は「美容歯科」という新しい世界へと本格的に船出した。

信州佐久にある山小屋遊びは、原始生活の再現。薪割りにヤマメ釣り、生活用具造りに修繕作業の、間断なく身体を動かすとドーパミンが湧出する。サウナでたっぷり汗を流し、夜オイルランブの灯の下で仲間との語りながまた楽しい。このところ久しく無沙汰である無性に届けたい。Mr. DENTAL-ARTISTE

Mr. DENTAL-ARTISTE



中原悦夫 NAKAHARA ETSUO

1959(昭和34)年4月27日、山口県生まれ。1984年、日本歯科大学歯学部卒。1987年、米国タフツ大学歯学部にて学ぶ。1989年、協立歯科開業。1993年、American Academy of Cosmetic Dentistry(アメリカ美容歯科学会)の日本人初の認定会員となる。2003年12月、帝国ホテルプラザ4Fに「HotelのホスピタリティとHospitalのヘルスケアの融合」をめざしてクリニック「デュボワ」を開業する。著書に「人生全開! ゴルフがうまくなる漢方」(幸井俊高氏との共著、ビジネス社)、絵本「美しさを育むために」(絵・麻生花見)など。

昨年十二月、東京・日比谷の帝国ホテルプラザにまったく新しいコンセプトに基づく歯科医院が誕生した。「HotelのホスピタリティとHospitalのヘルスケアとの融合」をめざすクリニックデュボワがそれである。院長の中原悦夫氏はわが国における「予防審美歯科」のパイオニア的存在として、十五年間にわたり啓蒙普及と医療システムの構築に尽力してきた。それは歯本来の機能を健康な状態に保ち続けることを基本として、心身への心地よいサービスの提供と美しさを引き出すための治療を目指すものである。端的にいえば「究極の審美とは、自分がもって生まれた歯を白いまま美しいかたちで生涯保ち続けることです」というデュボワの基本理念に帰着する。DUBOISとはフランス語で森を意味する。森がもつヒーリングや自然治癒力に託した〈美容歯科〉の世界とは――。

中原悦夫

NAKAHARA ETSUO
歯学博士・クリニックデュボワ院長

◎ 歯科医二代

父は戦後復員した後、郷里の山口県大島で歯科医を開業していました。十一歳上の兄はあまり興味がなかったようですが、私は幼稚園の頃から診療室や技工室が遊び場でした。石こうを練っているいろいろなケースに流し込んだり、時にはレントゲン室のボタンを操作したりして怒ら

れたものです。大島は瀬戸内海の西端にあるかなり大きな島で、当時十数軒の歯医者がありました。患者さんが溢れる時代で朝の五時、六時から並んで待っていました。ですから働きつめの父とはキャッチボールをしたことなどありませんでした。母は専業主婦でしたが、看護婦さんのいないときは手伝っていましたし、毎月一週間くらいはレセプト作成に

かかりつきりで、そんなときは自分で食事を作っていました。家は町中でありましたが、一キロも歩けば海があり、夏休みなどは毎日海水浴をしていました。サザエやアワビを採って父の晩酌の肴になったこともありました。

「将来は歯医者になっていろいろ研究してみたい」と書いたのを覚えています。単に歯科医になることより何かをしてみたいと思っていました。大学は医歯学系と決めていましたが、高校三年の十二月三十一日までにテニスの部活をしてたくらいで、受験勉強はまったくの付け焼き刃、ヤマが当たったというのが正直なところです。

小・中・高は大島でしたが、父と同じ歯科医になろうと思ったのは五歳の時です。小学校の卒業文集に

Vol.003 歯科と美容のコラボレーション

パーソナル・データ

- 01 生年月日 1959.4.27
- 02 出身地 山口県大島郡
- 03 血液型 B型
- 04 身長168cm、体重68kg、ウエスト?
- 05 結婚(年月日) 1994.4.27
- 06 家族構成 友里 三葉(1歳) パスカル (ミニチュア・ダックス、4歳)
- 07 両親 克己(享年82) いく代83歳
- 08 ふるさと 大島
- 09 先祖・家系 母方は京都の公家の出、平安時代に島流しにあい祝島に祠があるらしい。母は3歳から朝鮮で育つ。父方の先祖は不明だが、おそらく中国と推測。祖父母は開拓民としてシアトルに移住。父も5歳までシアトルで育つ。
- 10 健康状態 人間ドックで引っかかるものはいつもない。しかし、気孔腫にいつもあだ、こうだ、言われて中国に來いと誘われる。
- 11 健康法 呼吸法、漢方。肝臓をこわしたあと、全快後一日も休肝日を与えない飲酒
- 12 一日の睡眠時間 5~6時間
- 13 住居(広さ・形態など) 185m²、築30年の賃貸アパートメント
- 14 別荘 ログハウス
- 15 財産 運の強さ
- 16 性格 せっかち
- 17 ニックネーム エッピー
- 18 生活信条(モットー) 公平公正、人間は絶えず進化し続けるものである
- 19 座右銘(心に残る言葉) 成せば成る、成さねば成らぬ何事も……
- 20 宗教・宗旨 自己ならびに自然崇拜
- 21 趣味 ゴルフ、フライト
- 22 コレクション 数点の絵画と焼物、オイルランプ
- 23 ファッションの好み(フォーマル/カジュアル) コシノジュンコ、ジョルジョ・アルマーニ/エルメス
- 24 好きなファッションブランド エルメス(数年~数十年にわたって使えるブランドだから)
- 25 好きな色 グリーン、ライトブルー
- 26 嫌いな色 グレー
- 27 (愛用の、以下同)車 ベンツ600クーペ
- 28 靴 ベルルッティ
- 29 バッグ ダンヒル
- 30 ネクタイ エルメス
- 31 万年筆 S.T.デュボン
- 32 腕時計 身に付けない
- 33 好きな食べ物 そば
- 34 嫌いな食べ物 なし
- 35 行きつけの料理屋・レストラン ビーニデ・アライ、翁、かつら、たんと、登龍、職人館、マッシュルーム、海味、あさぎ
- 36 酒(酒量) ビール2本、酒2合、もしくはシャンパン1本、ワイン1本
- 37 タバコ 吸わない
- 38 葉巻 少々
- 39 月額の小遣い いまだ考えたことなし
- 40 好きなスポーツ ゴルフ、ダイビング
- 41 ゴルフ オフィシャルハンディなし、20前後
- 42 ギャンブル 運なし
- 43 勝負勘 仕事のみ当たる、病魔との勝負運あり

◎口答試問の一言
お陰様で日本歯科大学に合格しましたが、それにはちょっとしたエピソードがあります。入学願書に東京校がタメの時は新潟校を希望するかとあったのを私は「ノー」と書いていました。そこを口頭試問のときに突かれたのです。

「君は山口から出てくるのだから、東京も新潟も変わらないだろう。なのはどうして拒否するのか」と言われ、私は「学生時代くらい文化の中心の東京で勉強したいんです」と正直に答えました。その途端、三人の試験官が一斉にペンを叩きつける音がしました。

「ああ、これで終わった」と思いつつ、開き直って「歯科医のライセンスを取るなら郷里の近くにもあります。しかし歯科医になるためには歯科以外の知識や経歴を幅広く身につけることが大事だと思います……」と続けたら、再びペンを取り上げたので、これで首がながったと思います。

◎図々しい奴
歯学部での六年間はほとんどダイニングやワンゲルなどスポーツと遊びに明け暮れました。毎日きっちり学校には行くのですが、呆れるくらい講義には出ませんでしたね。実習は欠席二回で留年になるという厳しいものでしたが、ある朝目が覚めると始業を一時以上もオーバー。とにかく泡を食って学校に飛んで行ったら、運よく教室の扉が開いていた。残りは一時間。友人に聞くとテーマは小児歯科の入れ歯作り。もう死に物狂いでした。ところが誰よりも早く出上がり、先生の所に持っていくとこれがパス。ハンコを貰い教室を出ようとしたとき、一部始終を見ていた助教から呼び止められた。「お前、朝からいたか」「いや、ちょっと後輩と飲んでいて遅刻しました。でもハンコは頂きました」「図々しいやつだな、お前。覚えておくからな」。以後、実習のたびに助教から「中原、今日は手が遅いじゃないか」とよく冷やかされましたよ(笑)。

卒業謝恩パーティでその荻原助教(現教授)から進路を尋ねられ「一カ月ほどアメリカを回って来ようと思っています」と答えたら、「それじゃ四十日後、ボストンで会おう」ということになりました。実習事件以来、「おもしろい学生がいる」と興味を持たれ、何かと目を掛けていただいたお陰だと思っています。

この時のアメリカ一周旅行は良い思い出ばかりでした。ニューヨークで出会った紳士からは二晩にわたってご馳走してもらった。なぜ東洋から来た若者にそれほどまで親切にするのか不思議で、何か下心があるのではと疑ったほどです。思い切った彼に聞くと十五年ほど前、日本に到着した夜遅く、日光の町で一人の学生から宿泊を含め万事世話になった時のお礼を、頼りなげに歩いている私を見て返したくなったのだということでした。

◎渡米武者修業
タフツ大学歯学部のホワイト教授に就いたことは私の「審美歯科」への開眼でしたが、実は大学六年のとき夢の中で「美容歯科」というフレーズがふっと出てきたことがありました。審美という言葉もなかった時代ですが、これに近い何かがあった。あるはずだと思いつけていました。一九八七年十月、ニューヨークタイムズ紙上に「Cosmetic Dentistry(美容歯科)」の言葉を見つけたときが最初の一步でした。

今から考えると大胆不敵というか無謀この上ない行為ですが、私は無資格で医局に出入りすれば、大学の講義も受けられるという自由気ままな立場でした。これもひとえに教授夫妻のご配慮の賜物でしたが、私はあちこちで情報を集めては教授の紹介状を持って全米の大学を飛び

た日がありありと思ひ出します。行く先々での良き出会いがアメリカをいっそう好きにさせ、また行ってみたいという願いが三年後の渡米につながったと思います。

歯科と美容のコラボレーション

歩きました。口腔外科、矯正、インプラント、小児歯科等々、それぞれの専門科目でもっとも優秀な教授や研究室を訪ねて行くのです。

テキサス大学のベル教授は口腔外科の世界的権威でしたが、専門医でない限り普通では絶対に入室できないその研究室へ特別に二週間だけ入れてもらったことがあります。朝早くから夜遅くまで教授にピタリと張りつき、彼の一挙手一投足を目を皿のようにして見ていました。最後の日、明日ポストンに帰りますと教授にお礼を言うと「そうか、あと二週間でも三週間でもいいいいぞ」と言われたときは本当に感激しました。でも、私はその言葉だけで十分に満足でした。

ホワイト教授も帰国に際し「君のために枠を取ったからマスターコースをとっていきなさい」と熱心に勧めて下さいましたが、そのときも私は学位にはあまり興味がなかった。資格よりも実践」で歯科医師のライセンスがあれば十分でした。日本にいた時もそうですが、自分の本当の師匠は一人ひとりの患者さんだと思っていました。ですから一日でも早く日本に帰り、この新しい歯科医療を始めたくてしよるがなかった。

◎「予防」と「美容」

帰国後、ある美容外科に併設した歯科部門を立ち上げ、それ相応の成果を上げることができましたが、しばらくは暗中模索の状態が続きました。当時は歯科もまだまだ専門医優先の風潮が強く、口腔外科、小児歯

科、矯正、歯周病など縦割りのようになっていました。しかし私にはどれもやり甲斐があつて捨てがたい魅力がありました。

なんとかこれらを学際的につなげるアプローチはないかと出てきたのが、それまで胸の中に温めてきた審美(美容)と予防という考えでした。簡単にいえば口腔外科や矯正はもちろん、歯周病も入れ歯も美しくきれいに処置すること、それは子供であれ老人であれ同じです。それでは審美は予防とどう関係するのか、これも一言でいえば、究極の審美とは自分がもつて生まれた歯を白いままで美しいかたちで生涯保ち続けることだと思います。予防と美容、この二つが一九八九年に東京・恵比寿で開業して以来、標榜してきた理念です。

◎二度目の決断

米国の歯科事情を見てきた私の眼には、日本の医療システムは十五年は遅れているように思えました。だから私が「予防審美歯科」を標榜したとき、マーケティング・リサーチの会社も含めまわりの全員から反対されました。案の定、最初の一年間は苦闘の連続でした。翌年秋、運転資金が途切れるという瀬戸際で、ある患者さんが家族全員で私に任せて下さったのと、女性誌で私の主張が取り上げられたことがきっかけとなり、翌月からびっくりするくらい患者さんが訪れるようになりました。このたびの帝国ホテルプラザでの新規開業も当時と何か共通するものを感じています。どちらも今までに

ないコンセプトを打ち上げてスタートしましたが、最後は私の「行ける」という確信でした。世の中の流れを見定めた上での決断です。もちろん構想段階では躊躇も迷いもありました。これから待ち受けるあれこれを考えると、現状のままでも十分満足できたかも知れません。しかし、ここで動かなかったら自分じゃない、という強い思いが私の背中を押ししたのです。

◎帝国ホテルプラザ

一昨年夏、信州佐久平にある山小屋で過ごした帰り、車中でバツと閃いたのがホテルとのコラボレーションでした。もちろんアイデアだけで何のこねもありませんでした。最初から私のターゲットは帝国ホテルでした。業界に先駆けていろいろな新企画を打ち出してきたこのホテルなら、私の突拍子もない構想を受け入れてくれるかも知れないという一縷の期待感でした。その後、いくつかの縁と偶然が重なり帝国ホテルプラザ四階が今まさに「癒しのスペース」として変貌を遂げようとしています。

私がホテル業界に関心を持ち始めたのは国際学会などで諸外国を訪れるようになってからです。ホテルのサービスとは何かということに強く意識していました。当時からリッツ・カールトンをよく利用しましたが、「私たちは紳士淑女に奉仕する紳士淑女です」という彼らの理念に強く共感しました。ホテルの原点は

ホスピタリティという言葉に凝縮されていますが、医療の原点もまた同じだと思います。

人々はホテルで心のこもった様々なサービスを享受します。私が構想するホテル&クリニックとは、都会の中に居ながらにして美容やリラクゼーションといった様々な癒しを医療と共に受けられるというシステムです。歯科医療に美容や健康のノウハウを取り入れることによって「都心のリゾート」にしようというものです。少子化に伴うライフスタイルの洗練や高齢化による健康・美容のアンチエイジングと医療との結びつきを、私は「フライング・オブ・エイジング」と名付けています。いわば「美は齢を重ねるに在り」といったところでしょうか。

◎六本木男性合唱団

新規開業の準備で大わらわの昨年五月、ある人のご紹介で三枝成彰さんが団長を務める六本木男性合唱団に入団させていただきました。カラオケも苦手だったくらいですから、むろん楽譜など読めるわけがありません。見よう口まねでなんとか皆さんの後に着いていくのがやっとでしたが、九月の欧州公演旅行には私だけでなく妻と生後六カ月の娘も同行しました。常識的にはこんな時期にプライベートな旅行と思われるかも知れませんが、いちばん不安で大変な時期にあえて海外に出かけるという思い切った行動が好結果を生み出したように思います。昨年は父の死

中原悦夫

や娘の誕生など私生活でも多事多端でしたが、目まぐるしくいろいろのスケジュールの中で「六男」は私にほどよく体の力の抜けた自然流を与えてくれたように思います。

◎リスク・マネジメント

趣味の一つにセスナ機の操縦がありますが、飛行機に興味を持ったのはリスク・マネジメントという観点からでした。航空業界の第一義はお客様をA地点からB地点へ安全確実に移動させることですが、これは先のホスピタリティの大前提に当たります。飛行機は一人の機長の責任で運航しているように見えますが、全てのパイロットが同じルールに則ってやれば誰でも代替できるようにシステムが作られています。医療の現場はどちらかといえば一人の医師がオールマイティに取り仕切るといふスタイルが多いようですが、これだとその医師がいなくなればシステムは機能しなくなります。私たちが目指すシステムとは、カウンセリングや予防の段階ではスタッフの誰もが

私になり代わって役割を分担できるものであり、治療はそれぞれの専門分野の優秀な医師が担当することによって、患者さんを病的なレベルからより健康で安全なレベルに持っていくものだと考えています。

◎コーチング

そのためには優秀なスタッフを確保しなければなりません。お陰様でデューボワのスタッフは大半が二十代ですが、よそからも羨ましがられる存在です。私が常々言っているのは、例えばこんな言葉です。「最終決断をするのはトップだとしても、君達の判断は決断だと思っただけで欲しい」。単にものを教えるだけのティーチングではなく、人それぞれに埋もれている能力を引き出すコーチングができるかどうか、これが人を育てる要諦ではないかと思えます。私がそのコーチングの理論を教えられたのは、四年ほど前から参加しているエクストラオーディナリーゴルフスクールというNPO組織です。ここでは詳しいことはとも述べられませんが、米国ゴルフ界屈指

のプロ・コーチであるフレッド・シユーマーカー氏のレッスンの現場で学んできたことです。

◎本質至上主義

少子高齢化社会を迎えてわが国の医療制度は大きな曲がり角に來ています。医療制度改革についても様々な議論がありますが、私は次のような見方をしています。結論から言えば、医療の本質とは何かということ。人間は誰でも健康で美しく長生きをしたい、これが生の本質だと言えます。そのためには病気にさせない「未病」や病気を防ぐ「予防」という考え方が大前提となります。これが私の考える「医療の本質至上主義」です。ところが現状の保険医療制度は社会主義の考え方であり、市場原理にもとづく医療の現場は資本主義を通り越して資本至上主義にまで進展しています。私は十五年前にわたる「予防審美歯科」のパイロットステージで虫歯や歯周病は百パーセント予防できるという確信を得ました。例えばこんな比較があります。六十歳のA氏は

精巧なインプラントに六十万円の医療費を支払った。片や六十歳のB氏はこれまで予防に六十万円の医療費を支払ったが今も自分の歯である。両者とも支払った金額は同じですが、本質的価値という点では自分の歯を保ち続けているB氏の方に軍配が上がるのではないだろうか。

循環型の経済サイクルや環境保全といった世界的潮流を考えると「未病」というコンセプトはますます大きなウエイトを占めてくると思われる。現在、日本には六万五千軒の歯科医院がある。四万軒のコンビニよりも多い数です。そして一人の歯科医が生産できる患者数は約二万人といわれています。もし一人でも多くの歯科医がこのようなコンセプトに基づいた医療にシフト・チェンジをしていったならば、この国の医療改革は確実に進むに違いありません。保険制度という御興をみんなで担ぐのではなく、二十一世紀のいずれの日か「予防保険制度」が確立したときには、私は真っ先に加入したいと思っています。▲

- 44 よく泊まるホテル・旅館 アマンリゾート、二期クラブ
- 45 好きなリゾート パリ
- 46 最近の海外旅行先 ウィーン、グラーツ、モントレー、グリンデルワルト、コモ、ベネチア、ローマ、ベルリン
- 47 行ってみたい外国・場所 イースター島
- 48 海外在住経験 ポストン1年
- 49 語学力 英語
- 50 出身大学・大学院 日本歯科大学、日本歯科大学歯学部大学院特別研究科法医学教室
- 51 最初の就職先 協立歯科(兄のクリニック)
- 52 転職体験 美容外科
- 53 大の親友 妻
- 54 交友範囲 ジャンルを越えて幅広い
- 55 人物を観る一番のポイント 正直かどうか、夢を持っているかどうか
- 56 人生上の師 生き様においては父
- 57 今、最も注目する人物 デューク更家氏
- 58 購読新聞 朝日新聞
- 59 購読雑誌 ベン、家庭画報、プリオ、ナショナルジオグラフィック
- 60 私の最高の情報源 クライアント
- 61 活用している情報機器 PC
- 62 論文、著書 「笑顔のバリ君」、「ゴルフがうまくなる漢方」その他、原著論文10数編
- 63 好きなタレント、俳優 小雪、田村正和
- 64 好きなミュージシャン チェンミン(二胡)、寺井尚子(バイオリン)
- 65 好きな美術作品(または画家、アーティスト) 竹内栖鳳の「夜桜」、橋天啓の「万世太平の図」
- 66 好きな骨董・アンティーク オイルランプ
- 67 私の一番の宝物 モルバライト(チェコに落ちた隕石)
- 68 リーダーの第一条件 100年後を見据えた決断
- 69 今、最大の関心事 大学医学部・歯学部の専門教育について
- 70 私の気分転換法 六本木男性合唱団の練習
- 71 10年後の私 医療改革を成し遂げて講演活動
- 72 私の夢 臨床の合間に自家用飛行機を操縦して各地で講演活動を行なう
- 73 本日のスケジュール 某月某日、午前10時から午後7時まで診療。その間、帝国ホテルの担当者と専用エレベーターの開通時期について打ち合わせ。昼の休憩時間を利用して日本橋高島屋で開催中の大樋焼きの大樋年雄展を見学。日本歯科漂白研究会の編集部と「コスメティック・ホワイニング」誌の編集について打ち合わせ。診療後、六本木男性合唱団の練習に向かう。当日の練習曲は「からたちの花」「赤とんぼ」。6月6日に行われるアテネ五輪聖火リレーの式典でボランティア・ステージが行われる由。
- 74 現在のポケットの中身 いつもハンカチのみ